
再会

segawa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
再会

【Nコード】
N63920

【作者名】
segawa

【あらすじ】
戦いから時は流れ：再会の時が訪れる。一話完結、全二話。それぞれユリアンとミッターマイヤーが主人公です。

宇宙暦86X年6月（前書き）

オリジナル・キャラクターは存在しませんが、原作後の登場人物について作者独自の設定があります。

宇宙暦86X年6月

ユリアン・ミンツはどこまでも広がっているかのように見える草原をひたすらに歩いていった。周りには動物はおろか、木の一本でさえ見いだせない。辺り一面の緑色、その中を通る砂色の一本の道、そして白い雲がところどころに浮かぶ薄い空だ。

「ふう、ずいぶん歩いてきたんだけど」

思わず独り言を漏らしたそのとき、ユリアンは道の先に人影らしきものを認めた。歩みが自然と小走りになる。体は羽のように軽い。ここまで長い間歩き続けてきたが、疲れは不思議と感じなかった。ぼんやりとした人影が、しだいに懐かしい輪郭を伴って近づいてきた。

「よう、ユリアン！」

明るい褐色の髪、陽光の踊るような緑色の瞳。オリビエ・ポプランがそこにいた。

「ポプラン中佐！ お久しぶりです、ここにいらしてたんですね」

「こっちの美女がおれを呼んでるんでね、ご期待に添うべくやってきましたというわけさ」

まったく変わらないポプランの様子に、ユリアンも自然と笑みがこぼれる。長い間会っていなかったことが嘘のような気安さだ。そのとき、ポプランの背後に、明るい色の髪をした人物が現れた。

「美女がお前さんと呼んだんじゃないかって、お前さんが美女につられて勝手にやってきたんじゃないのか」

髪と同じく明るい色の瞳を持つ、すっきりとした容姿のイワン・コーネフだった。

「コーネフ少佐！」

ユリアンは並んで立つポプランとコーネフを見て、温かいものが胸の内に迫るのを感じた。そうだ、ハートの撃墜王とクラブの撃墜王

は、いつも一緒だったではないか。これがあるべき姿なのだ。そう
本人たちに言えば、迷惑そうな顔をすることは間違いないが。

「ミンツくん、今はお行き。まだまだ君に会いたがっている人がた
くさんいる」

「ユリアン、また色々なところを探検しようや」

コーネフが先を促す。ポプランが再開を約束する。

「はい、ぜひ。コーネフ少佐、また面白い本があったら教えてくだ
さいね」

名残惜しいが、また会える。ユリアンは二人に敬礼をすると、先へ
歩き始めた。「おうい、可愛い女の子はいいのか？」と背後から呼
びかけてくるポプランの言葉に苦笑しつつも、歩みは止めない。――
中佐、ご存知でしょう。僕には、ともに歩むと心に決めた女の子が
いるんです。

ポプラン、コーネフとわかれてすぐ、ユリアンはまた懐かしい人
たちと出会った。背筋をまっすぐと伸ばしたムライ、大きい体に大
きい声のパトリチエフ、穏やかで控えめなフィッシャーである。み
な第十三艦隊結成以来のヤンの幕僚であり、ユリアンより年配だが
共に戦争を戦った仲間だ。

「ユリアン、君は最後までよく頑張った」

ムライがそう言葉をかけてくれる。パトリチエフに大きく背中を叩
かれよろけてしまったところをフィッシャーが支えてくれた。去り
際にムライに言われた「ところで、ポプラン中佐の悪巧みには乗ら
ないでくれるとありがたいんだがね」という一言には、またも苦笑
するしかなかったが。

次に出会ったのはフェザン商人のボリス・コーネフと彼の信頼
する相棒、マリネスクだった。彼らは草原にただ佇んでいたのでは

ない。草原に伸びた道の脇で胡坐をかき、地面に広げた大きな紙とにらめっこしていたのである。

「やっとなたか、ユリアン」

キャプテン
「船長コーネフ、何をなさっているんです？」

アンデューティネス
「新しい親不幸号の設計図の最終確認さ」

ボリス・コーネフは顔を上げずにそう言った。なるほど、彼が目に見えている紙面には、なにやら複雑な図形や数字が並んでいる。

アンデューティネス
「親不幸号？ベリョースカ号じゃなくてよろしいんですか？」

「ああ、ベリョースカ号はもうあるのさ。こいつは二つ目の船だ。なんでこっちには身一つでしか来れないんだ。おかげでそれまでの稼ぎが全部パアだった」

ユリアンが「それはお気の毒ですね」と声をかけるべきかどうか悩んでいると、穏やかな目をした小太りのマリネスクがほほ笑んで言った。

「気にしなくて結構ですよ。こちらでもなんとかやっていますからね」

「そうですか。二人ともお元気そうな様子がうかがえてよかったです」

ボリス・コーネフは立ち上がって後ろを軽く払うと、ユリアンに手を差し出した。

「先へ行くんだろ、ユリアン。また船に乗りに来いよ、お前さんになら特別に三十パーセントの代金で乗せてやる」

「船長にしてはだいぶん太っ腹ですね」

コーネフの握手に応じながら、ユリアンはそう返した。立ち上がったボリス・コーネフの姿を改めて見ると、先ほど出会ったイワン・コーネフに背格好も目鼻立ちもよく似ていることに気がついた。やはり血がつながっているのだな―二人はここで会うことができたのだろうか。しかしユリアンは尋ねることはせず、再び歩き出した。

どこまでも続くかと思われた草原だったが、ユリアンの視線の先にぼつぼつと背の低い木々が現れ始めた。ただ、未だに動物はどこにも見当たらない。花をつけている木もある。これはなんという花なのだろう―初めてみる種類の花だ。ユリアンが赤に限りなく近いピンク色のそれに手を伸ばしたそのとき、彼を呼ぶ声がした。

「ユリアンくん」

「メルカツ提督！それに、シュナイダー中佐も」

花をつけた木の後ろから、旧銀河帝国の軍服を着た二人が現れた。軍服―？そうだ、ポプランもコーネフも、仕様は違えど軍服を着ていた。かくいう自分も、自由惑星同盟軍の軍服を着ているではないか。丁寧に中尉を表わす階級章までつけて。ユリアンの思考を読みとったかのように、シュナイダーが言葉を発した。

「ユリアン、制服は異なっても我々は仲間だった。今は自分の選択に後悔していない」

「ええ、中佐、ばくもそう思います」

シュナイダーの言う「選択」の意味を完全に理解して、ユリアンは短い言葉に力を込めた。メルカツは長々と言葉に出しては何も言わなかった。彼の重厚な性格を表すかのような敬礼に、ユリアンは精一杯の敬礼を返した。

道の周りの木々の背が、しだいに高くなっていく。生え方も、まばらではなく密集してきた。道の周りに木々がだんだんと集まってくるかのような感覚だ。今はもはや遠くを見渡すことはできない。

「そこから先は森だ」

「バグダッシュ大佐」

木によりかかるようにして立ち、ユリアンを待ち受けていたのはバグダッシュだった。「主義主張は生きるための方便」と言って救国軍事会議からヤンの元に転向し、常に飄々として悪びれない人だった。だが今ではユリアンは知っている。彼もまた、最後までヤンへ

の忠誠を守った一人だったのだ。

「おれなんかより会いたい奴がいるだろう。先を急ぐことだな」

「大佐にだってお会いしたかったですよ」

フン、とバグダッシュは鼻を鳴らしたようだった。

森に入ると、ユリアンは少し不安を感じた。背の高い木々に阻まれて、この先の様子がさっぱりわからない。先ほどまでは見上げれば一面に空が見えたけれど、今は葉の隙間に薄い青がとぎれとぎれに覗くだけだ。道が暗い。そのため、黒い影が突然ユリアンの前に現れたときユリアンの心臓はとび跳ねたが、影の正体が彼の雄牛のような目をした黒色の巨人だとわかると、一も二もなく彼に駆け寄った。

「あなたは付いてきてくれますよね？」

「ええ、人は運命にはさからえませんか」

ルイ・マシUNGは一言そう言った。ユリアンにはそれだけで十分だった。

マシUNGという道連れができたことで、ユリアンの少しの不安は消え去ってしまった。そのため、森の中に断続的に響く音がだんだんと大きくなってもユリアンは平然としていた。

「木を切っている音かな？」

「もう少しでわかりますよ」

マシUNGは何か知っているようだった。

一キロも進まないだろう内に、ユリアンは音の正体を確かめることができた。やはり、木を切っている音だった。そして、木を切っているのは――

「ユリアン!」「ユリアンじゃないか!」

「おい、ユリアンだぜ」

ローゼンリッター 薔薇の騎士連隊の面々だった。ユリアンが白兵戦の訓練をする時、皆よく付き合ってくれた。作業の手を止め、ライナー・ブルームハルトが近づいてきた。

「やあユリアン、鍛えてるか?」

そう言ってユリアンの二の腕のあたりを叩く。

「言いにくいんですが最近サボりがちなんです。ところで、中佐たちは何のために木を切っているんですか?」

「ああ。訓練を兼ねてっていうのもあるけど。力仕事は我々の仕事だと思っている方々がたくさんいるんだよ」

ブルームハルトの笑顔には邪気がない。彼らの隊長たちの行方を尋ねると、中將はどこかへ散歩中だ、と断ったうえで第十四代薔薇のローゼンリッター騎士連隊長の居場所を教えてくれた。

「リンツ大佐」

道から少し奥に入った場所で、カスパー・リンツはスケッチブックと鉛筆を手に丸太の上に座っていた。

「動いている人物をモデルにするのも、筋肉の動きがわかってなかなか勉強になるんだ」

戦場では決して見せなかった表情を浮かべたカスパー・リンツがそこにいた。トマホークを持たせれば敵無しの薔薇の騎士連隊長がスケッチブックに向かうとき、とても穏やかな表情になることをユリアンはいくつかの経験から知っていた。

「ユリアン、今度モデルになってくれ。ここはどうも男くさい、どうせなら美少年にモデルを頼みたいんだ」

「ぼくでよろしければ。でも、大佐、無理なポーズは無しですよ」カスパー・リンツに応えながら、ユリアンは「少年」という単語が自分の頭の中でひっかかった。ぼくは―ぼくは、果たして少年と呼ばれる年齢だったろうか。

薔薇の騎士連隊の面々と別れ、ユリアンとマシンゴは森の中を進んだ。しばらく歩いたところで、水の流れる音が聞こえてきた。

「どうやら川が流れているね。道を遮っていないからいいのだけだ」

ユリアンたちの前に流れていたのは小川だった。安心したことに、木で造られた橋が架かっていて、向こう側に渡れるようになっていく。ユリアンは橋の向こう側に、一組の男女が立っているのを見つけた。

「キャゼルヌ夫妻だ！」

キャゼルヌはユリアンに気がつくやうに片手を挙げた。

「中途半端な時間に来たな、ユリアン。もう少し遅い時間だったらうちで食事を用意できたんだが。もちろん、あいつも呼んでな」

「お気持ちだけでも嬉しいですよ、中将」

「これからはいつでもおいでなすってね、ユリアン。この人ったら、シャルロットたちがいないから毎日寂しがっているんです」

「おい、おれを娘離れができていない親みたいに言うな」

「あら、だってその通りじゃないですか」

ユリアンがくすくす笑うのでキャゼルヌは少し機嫌を損ねたようだったが、咳払いを一つすると改まった口調でユリアンに話を切り出した。

「さて、ユリアン。お前さんに会わせたい方々がいらっしゃるんだ」キャゼルヌが後ろを振り向く。ユリアンもつられてキャゼルヌが向いた方向に視線を向けた。

そこに現れたのもまた、一組の男女だった。亜麻色の髪をした長身の男性と、優しい雰囲気をもった女性だ。気がついた時にはユリアンは自分の両親の腕の中にいた。

「お父さん、お母さん…」

「ユリアン、私たちはずっとユリアンを見ていた。お前が、悩み、決断し、前に進んでいくのを。大変な時にそばにいてやれない親ですまなかった…」

ユリアンは首を振るので精いっぱいだった。両親は温かかった。確かに、ユリアンが両親と過ごした時間は短いものだったのかもしれない。しかし、彼が存在するのは間違いなくこの二人のおかげなのだ。そして、存在しているからこそ喜びも悲しみも知ることができる…

「ユリアン、行きなさい。あなたは私たちだけの息子ではないのでしょう？」

目に涙を溜めた母親がほほ笑みながらそう言った。

ユリアンとマシユンゴは森の中をさらに進んだ。ユリアンは彼の忠実な護衛に話しかけた。

「あなたとは歩き回ってばかりですね。フェザーン、地球、レダ？号、ブリュンヒルト…。いや、走り回っていることの方が多かったかな？」

本当は歩き回るだとか走り回るだとか、そんな平和的な言葉で片付けられる経験ではなかった。自分は、多くのものを失ったと思っていた。しかし、今になってわかる。失ったものは、いつか取り戻すことができるのだ…

「あれ、ユリアンじゃないか！来るのが早すぎやしないか？」

鉄灰色の頭がひょっこりと木々の間から現れた。

「アッテンボロー提督！お久しぶり…でもないですね」

「ああ、お前さんとは最近会ったばかりだ。こんなにすぐ再会するとはな。俺の後追いでもしたか？」

「違いますよ！」

アッテンボローは陽気に笑った。

「一足先に探検させてもらったよ。他の奴にでかい顔をされるのはおれの性にあわないんでね」

「それで、どうでした、こちらは？」

眉を少ししかめ、軍服のベレー帽を脱いで指で回しながらアッテンボローは彼らしい言葉を言い放った。

「つまらん、つまらん。騒ぎもないし反抗するものもない」

「ムライ中将にならさっきお会いしましたよ」

「本当か。おれはまだ会ってない。これから会わずにすむことを願うんだがな」

ユリアンはそういう彼の瞳が一瞬愉快そうに光るのを見逃さなかった。ああ、彼は昔から少しも変わらない―あれ、昔というのはいったい何年前のことだった？

「そうだ、ユリアン。貴官の義理のお父様を呼んで差し上げよう」
いつの間にやらアッテンボローはユリアンの方に手を回していた。
そしてユリアンが口を挟む暇もなく、散歩中だというところある人物を呼びつける。

「おうい、シェーンコップ中将！息子さんが待ってますよー」

数瞬後、人をくったような表情の、グレイの頭髪を持つ類まれな美男子が姿を見せた。

「ご婦人方を後に残してくるとは感心しないな、ユリアン」

ユリアンは負けじと言い返す。

「こんな物騒なところにカリンやフレデリカさんを先に行かせるなんて、ぼくにはとても怖くてできませんよ」

「ほう、言うようになったじゃないか」

シェーンコップはにやりと笑う。

「ユリアン、おれの夢はな、百五十歳まで生きて、孫や曾孫たちに厄介払いできると嬉し泣きされながら死ぬことだったのさ」

本気なのか冗談なのか、ユリアンがシェーンコップの表情から彼の

真意を知ることが不可能だった。わかるのは、シェーンコップには確かに曾孫がいるということだ―そしてそのことはユリアン自身に大いに関係のあることだった。

「シェーンコップ中將、中將の孫も曾孫もみんな元気にやっていますよ。そして自分たちの先祖が勇名高い薔薇ローゼンリッターの騎士連隊長であることを誇りに思っていました」

フツと笑ってシェーンコップは応えた。

「ユリアン、どうやらお前の教育は上手くいっているようだな」

アッテンボローは、全く納得がいかない、といった風の表情を浮かべた。

ユリアン、すぐそこだ。

アッテンボローの言葉に促され、ユリアンとマシユンゴはまた道を歩き始めた。道はだんだんと太くなっていく。これは、ゴールが近い証拠なのだろうか。

「あれ、道が曲がってる」

今までは比較的まっすぐ続いていた道であったが、ユリアンの視界の先でそれは急なカーブを描いて左に曲がっている。ユリアンは走り出していた。マシユンゴが後ろに従う。心臓が音を立ててうるさい。ユリアンは道の先にだけ心向けていたため、周りの木々の高さがしだいに低くなり、生え方もまばらになっていくことに気がつかなかった。カーブを回ったユリアンの視界に広がるのは、背の高い木が生えない広場のような空間だった。木製のベンチが数個、向きもばらばらに置かれている。そして、その上の一つに―

ユリアンはベンチの上で寝そべる人物の元へおそるおそる歩み towarded。つい一瞬前まで走っていた足が、急に力を無くしたようだった。彼はずっと眠ったままではないのだろうか―しかし、そんな心配は杞憂だった。ベンチの上に寝そべっていた人物は、顔に被せ

ていたベレー帽を自分の手で取り上げると、ゆっくりと軍服に包まれたその身を起こした。こちらを向いたその顔に、笑みが広がる。

「ユリアン」

「ヤン提督！」

ヤンは立ち上がってユリアンを迎えた。ユリアンはヤンを見上げた。――そうだ、ぼくは少年だ。ヤン提督の前では、ぼくはずっと少年なのだ。提督と出会って、ぼくの人生は大きく動き出した――

「提督、提督、ぼくは提督のお役に立てましたか？」

ほほ笑んでいたヤンは、一瞬だけ表情を大きく崩した。

「ぼかだな、ユリアン」

ヤンの大きくて温かな手がユリアンの亜麻色の髪を撫でる。

「ユリアン、お前はよくやってくれた――よくやってくれたよ。お前は私の自慢の息子だ」

ユリアンは自分の頬も目頭も熱くなっていることを自覚していた。様々な思い出が胸に浮かんでは消えた。大きなスーツケースを抱えてヤン宅のインターホンを押したこと、預かったペットの世話をさぼって叱られたこと、出征中のヤンの帰宅を家で待ち続けたこと。黄金のイゼルローン時代、ヤンの結婚式、あの夜二人で交わした会話。ヤンを助けられなかったこと、イゼルローン共和政府司令官となったこと、皇帝^{カイザー}ラインハルトと対峙したこと。そして続く長い建設の時代……

「提督、ぼくはずっと、提督のお役に立ちたかったです。ぼくは――」

「ユリアン」

ヤンはユリアンの髪をくしゃっと掻き乱し、ユリアンのダークブラウンの瞳を覗きこんだ。

「私はお前が元気にしてくれてくれるだけでいいんだよ。お前の淹れてくれる紅茶がどんなに不味くたってかまわないんだ。親というの

は、そういうものさ。だけど、そうだな、幸いなことにお前の淹れ
てくれる紅茶はとても美味しい。だからユリアン、紅茶をおくれ」
ユリアンはどうしようもなく心が満たされるのを感じた。帰ってき
た―帰ってきたのだ、ここに。

「はい、提督！」

宇宙暦86X年6月、ユリアン・ミンツはその生涯を閉じた。彼
は自由惑星同盟軍中尉、イゼルローン共和政府軍司令官、そして歴
史家として後世に名を残している。

いとしい者よ、あなたは私を愛するか

ええ、わたしは愛します

生命の終りまで

冬の女王が鈴を鳴らすと

樹も草も枯れはてて

太陽さえも眠りに落ちた

それでも春になれば鳥たちは帰ってくる

それでも春になれば鳥たちは帰ってくる

（『銀河英雄伝説10落日篇』第九章黄金獅子旗に光なし より）

新帝国歴05X年8月（前書き）

オリジナル・キャラクターは存在しませんが、原作後の登場人物について作者独自の設定があります。

新帝国歴05X年8月

ウォルフガング・ミッターマイヤーは走っていた。体操選手を思わせる引き締まった体つきは、彼の走りをより軽快なものに見せていた。

「さて、これはいくつめの丘だったかな」

緩やかな丘の斜面を駆け下りたと思ったら、また目の前に緑色の芝生で覆われた丘が現れたのである。ミッターマイヤーは足を止め、おさまりの悪い蜂蜜色の髪をかき上げた。「気がついたら走っていたのだ。真っ青な高い空と、何連にもつながる緩やかな丘と、そのふもとに点在する日の光を反射して輝く小さな池。今のところこれらが彼の視界に入るものすべてだった。人間はおろか動物も虫も花も、そして雲でさえひとつも見あたらない。ふむ、と鼻を鳴らしてミッターマイヤーは腕組みをした。迂回すると時間がかかりそうなのでひたすら丘を登っては下りてきたが、このあたりで一つ作戦変更するべきなのかもしれない。

「閣下！」

ミッターマイヤーは目線をあげて突然現れた声の主を捜した。目の前の丘を駆け下りてくる人物は、彼の信頼する年長の部下だった。

「ビューロー！？ビューローではないか！」

ビューローは立ち止まって彼の上官に敬礼して見せた。

「閣下がいらっしやると伺って、勝手ながらお迎えにあがったのです。しかし、こんなに早くお会いできるとは考えておりませんでした」

「走ってきたのさ。ここのところ運動不足であつたし、よい訓練になった」

ビューローは少し驚いた顔をした後、ゆっくりと笑った。

「閣下らしい。閣下、あと二つ、丘を越えてください。二つ目の丘

を越えたら石でできた古い門がございますので、おくぐりになってください。後は迷うことはありませんまい」

「卿はともに来ないのか」

「小官は後からゆつくり参ります。……バイエルラインあたりなら、閣下とともに走りもしましようが」

「そうだな、いや、むしろあいつはおれを置いて先走りかねんぞ」
ミッターマイヤーとビューローは顔を見合せて笑った。

「あいつにはたくさん仕事を任せてきたんだ。まだまだ来てもらっては困る……」

ビューローの言葉に従って、ミッターマイヤーは再び丘を登り始めた。そういえば、とミッターマイヤーは思った。いくら緩やかだとはいえ、これだけ斜面を登り下りしているのに、自分は汗一つかいていないし、足に疲れがきているというわけでもない。不思議な感覚だった。

ミッターマイヤーは下りの丘の斜面に黒い服を着た人物が寝そべっているのを見つけた。近づいてみると、黒い服は帝国軍服であった。彼も、そして先ほど出会ったビューローも、同じ仕様の軍服を着用している。軍服の主を確認しようと、回り込んで顔をのぞき込んだミッターマイヤーは、思わず声を上げてしまった。

「ケスラー！」

完全に昼寝の体制をとっていたケスラーは目を開けると、慌てたように身を起こした。

「いや、その、卿が来ているとは……申し訳ない」

「めずらしいものを見せていただいた。憲兵総監閣下の昼寝姿とは」
ケスラーは苦笑して笑顔のミッターマイヤーに向き直った。軍服を着ていなければ、少壮の弁護士かと勘違いしてしまうだろう容貌の彼だった。

「言い訳をさせていただくと、普段から昼寝ばかりしているわけではない。ただ・・・気にかかることがあってついここまで足を伸ばしてしまうのだ」

「気にかかることと、とは？」

いついかなるときでも冷静さを失わない―少なくともミッターマイヤーは彼をそう評価していた―ケスラーであるが、先ほどからしくない様子ばかり見せる。「その、つまり」などと口ごもること数秒、そして一気にこう言っただけだ。

「ええい、卿は私の心情を理解してくれると思うから話すのだがな。あいつが・・・マリーカのことが、気にかかってここまで来てしまうのだ。あいつはその・・・少しばかり、抜けているところがあるから、迷ってしまうのではないかと・・・」

ケスラーの頬はうつすらと赤く染まっている。ミッターマイヤーはグレイの瞳を細めて自分の肩より高い位置にあるケスラーのそれを叩いた。

「ああ、卿の気持ちはよくわかる」

ケスラーはミッターマイヤーの瞳を見つめ、それから吹っ切れたように笑った。

「そう言えば、卿とこのように砕けた口調で話す機会はなかなか持てなかったな・・・」

ケスラーと別れたミッターマイヤーは、いま一つ丘を越え、ふもとに下りきったところで、水彩画のスケッチをするメックリンガーに出会った。相変わらず口ひげをきれいに切りそろえている。この風景はあまりに単調で鑑賞の対象としては不満なのではないか、と尋ねたら、「単調な風景に色をつけるのも芸術家の仕事」と返されてしまった。ミッターマイヤーはメックリンガーのスケッチを覗きこんだ。

「おれは芸術のことはよくわからないのだが・・・卿のスケッチを

見ると、ここの実際の風景も急に息づいて見えるから不思議なものだな」

「その言葉だけで十分だ」

メックリンガーはほほ笑んだようだった。

「ミッターマイヤー！」

ミッターマイヤーがメックリンガーのスケッチから顔を上げると、少し離れたところにある石の門―ビュローが話していたものに違いない―から、一組の男女がこちらに向かってくることに気がついた。この声には聞き覚えがある。

「ワーレン！ワーレンだな？」

脱色した銅線のような色の髪、たくましい長身の持ち主であるワーレンは、片手をあげてミッターマイヤーに応えた。彼の隣を歩く女性を、ミッターマイヤーは知っていた。かつて同僚から見せてもらった、一枚の立体写真の中においてではあるが。ワーレンはミッターマイヤーのもとへ来ると、右手を差し出しながら口を開いた。

「卿が来ているという噂を耳にしてな。様子を見にやってきた」

「卿と会えて嬉しい。それと、奥方にも」

ミッターマイヤーはそう言って、ワーレンの手を堅く握った。ワーレン夫人は線の細い、儂げな印象を与える女性だった。たくましい体つきのワーレンの隣にいるから、よけいにそう感じるのかもしれない。ミッターマイヤーはまぶしい思いで、改めてワーレン夫妻を見つめた。

「そんな顔をするなら、早く行け、ミッターマイヤー」

ワーレンは笑い、今度は左手でミッターマイヤーの背中を叩いた。ミッターマイヤーは義手とは明らかに違う、暖かな感触を背中に受けた。

「すまない。・・・フラウ・ワーレン、失礼する」

ミッターマイヤーはワーレン夫人に一礼すると、再び走り出した。

丘のふもとに突如現れた石の門は、同じく石でできた壁に囲まれている敷地への入り口のようなであった。ミッターマイヤーは門をくぐり、未知の領域へ足を踏み入れた。ミッターマイヤーの視界に移ったのは、外と変わりばえのない緑色の芝生と石でできた細い道、そして白いテーブルについてカードに興じる軍服姿の二人の男であった。銀色の頭髮が先に揺れた。

「ミッターマイヤー」

「ファーレンハイト、それに、ルッツも」

なんとも色素の薄い組み合わせであった。ファーレンハイトは銀髪、ルッツは白に近い金髪の持ち主である。目の前の二人の同僚は同期であったことを思い出し、ミッターマイヤーがこの組み合わせに納得する一方で、ファーレンハイトはにやりと笑ってルッツに話しかけた。

「おれの勝ちだ、ルッツ」

「おい、ゲームはまだ途中だぞ」

ルッツは抗議したが、ファーレンハイトは面白そうに続けた。

「違う、この前の賭だ。ミッターマイヤーとビッテンフェルト、ミユラー、アイゼナツハのうちだれが一番早くここに来るか賭けただろう。おれはミッターマイヤーに賭けた。お前はアイゼナツハに賭けたではないか」

「ああ、あの時の話か」

ルッツは苦笑して天を仰ぐ。驚いたのはミッターマイヤーだった。

「ちょっと待て。卿らはそんな賭をしていたのか」

「許せ、ミッターマイヤー。少々退屈していたのでな」

そう言うファーレンハイトの声音に、反省の色はない。真摯さにかけてはルッツの方がだいぶ上であった。

「すまない、このとおりだ」

ルッツは頭を下げてみせたあと、真剣な口調で続けた。コバルトブルーの瞳が、一瞬だけ藤色に光った。

「ミッターマイヤー、おれ達は皇帝ラインハルトに賭けて戦ったのだ。卿が・・・引き継いでくれたのだな」
何を、とはルッツは言わなかった。ミッターマイヤーはかぶりを振った。

「おれができたことはほんのわずかだ。フロイライン・マリンドルフ、いや、皇太后ヒルデガルド様と、みなの方のおかげだ。残ったものの責任を果たしたに過ぎぬ」

ルッツもファーレンハイトも無言で答えた。ミッターマイヤーは笑顔をつくって言った。

「それではおれは失礼する。今度はカード勝負にも混ぜていただけるとありがたい」

「ああ、いつでも勝負をしよう・・・」

ミッターマイヤーは再び走っていた。石でできた道の脇には、相変わらず緑色の芝生が広がっている。門をくぐる前と違うのは、道のりが平坦であることと、左右遠くに石の壁がそびえ立っていることだ。また、等間隔で現れる木の扉つきの石壁が、前方の見通しを阻んでいた。扉自体は簡単に開くので、ミッターマイヤーの前進が止まることはなかったが。

ミッターマイヤーは、ケンプ、レンネンキャンプ、シュタインメッツらかつての同僚たちと再会し、挨拶を交わした。ケンプと向かい合ったとき、彼が奇妙な表情を浮かべたので、理由を尋ねたら、「いや・・・おれの記憶より卿は小柄であるな」と言われてしまった。卿の体格がよすぎるのだ、と言い返そうとしたが、負け惜しみを言ったと思われるのがいやで止めてしまった。――元帥のマントが無いから威厳が足りないように見えたのかもしれない。いや、ケンプはおれが元帥に序せられる前に行ってしまった。そういえば、おれは元帥のマントをどこへ置き忘れてしまったのだろう・・・

ミッターマイヤーがいくつめかの木製の扉を開けたとき、視覚より先に聴覚が今までとは異質な存在を感じ取った。犬の鳴き声がするのである。ミッターマイヤーは首をめぐらし、ある光景を認める
とゆっくりと息を吐いた。

「・・・オーベルシュタイン」

後ろ姿を見せていたオーベルシュタインは、無言のままミッターマイヤーに向き直った。冷たく鋭利な眼差しであった。しかし、ミッターマイヤーは記憶の中のオーベルシュタインの眼差しと、今のそれとに明らかな違いがあることに気がついた。彼の目は、もはや異様な光を放つ必要はないのである。逡巡ののち、ミッターマイヤーはオーベルシュタインに近づいた。

「卿の犬の話を、耳にしたことがある」

ミッターマイヤーはオーベルシュタインの目を見ながら言った。

「ミュラーが言っていた。卿は柔らかく煮た鶏肉しか食べない愛犬のために、夜中に自ら肉屋へ鶏肉を求めに行く。この話は本当か」
オーベルシュタインの表情には一分の変化もなかった。彼は口だけを動かした。

「本当だ」

「そうか」

ミッターマイヤーはしゃがみこむと、オーベルシュタインの傍らに座る犬の目線と自分のそれとを合わせた。緩く握った拳をゆっくり近づけたが拒絶されなかった。そのまま首を掻いてやる。器量がよいとは言えない犬だ―だが、すべての生きる犬と同じように、暖かった。

先に進むことばかり考えていたミッターマイヤーは、扉の向こう側から人がやってくるなど考えもしなかった。そのため、今まさに自分が開けようとしていた扉が反対側から開けられたことは、

ミッターマイヤーにとっては不意打ちであった。彼が体のバランスを立て直すことができたのは、そのたぐいまれなる運動神経のおかげである。

「ミッターマイヤー提督」

「キルヒアイス！」

ミッターマイヤーがあと少しでぶつかるところだった相手は、穏やかな笑みを浮かべた赤毛の青年、ジークフリード・キルヒアイスだった。

「ミッターマイヤー提督が近くまでいらっしゃっていると聞いて、探していたのです」

「そうだったのか。・・・卿はこんなに背が高かったかな」

ミッターマイヤーは思いきり首を傾けないとキルヒアイスと目線を合わせることができないのだった。キルヒアイスは小首をかしげてミッターマイヤーの言葉を聞いていたが、おかしそうに笑って言った。

「こちらに來たばかりの人には、よく言われます。さあ、ミッターマイヤー提督、行きましょう」

キルヒアイスはミッターマイヤーに先を促した。石の道を、二人で進んだ。

「ミッターマイヤー提督にはずっとお礼を申し上げたかったです。こうしてまたお会いできて、嬉しく思います」

そう言うキルヒアイスに、ミッターマイヤーは気がついたら恨み言を口にしていた。

「私も卿に言いたいことが山ほどあるぞ。さっさと行ってしまつて……。何度卿がいたら、と願ったことか」

「申し訳ありません」

キルヒアイスが相変わらずほほ笑んでいるので、ミッターマイヤーはそれ以上彼を弾劾する気になれなかった。ミッターマイヤーに先立ってキルヒアイスが木製の扉を開けたとき、音楽的な響きすら持つ美しく弾んだ声がミッターマイヤーを迎え入れた。

「ミッターマイヤー！待っていたぞ」

獅子のたてがみを思わせる豪華な金髪を揺らし、ラインハルトがかけ寄ってくる。

「はっ、陛下…」

様々な思いが胸に去来するのを自覚し、ミッターマイヤーは彼の生涯の忠誠を捧げた対象に恭しく頭を垂れた。彼はいつでもそうしたいと望んで、自分の持つ最も研かれた宝石を目の前の美しい青年に差し出してきたのである。

「ミッターマイヤー、私は卿に感謝してもしきれないことも、卿に苦勞ばかりかけたことも承知している・・・だがやはり、礼を言わせてくれ」

ラインハルトが行ってしまった後の時代を思い出し、ミッターマイヤーは目頭が熱くなるのを防げなかったが、きっぱりとした口調で言った。

「苦勞などと思ったことはございません。もったいないお言葉です」「そうか」

彼の皇帝は誰ひとりまねることのできない笑顔をつくった。

「姉上が作ってくださいだったケーキがあるのだが・・・卿は先に行きたかろうな。また後でゆっくり話を聞かせてくれ」

「御意！」

ミッターマイヤーは万感の思いをこめて敬礼した。

芝生の中を通る石の道を走りながら、ミッターマイヤーはこの石の壁で囲まれた敷地も終わりが近いことを感じていた。残り少ないであろう扉の奥に、彼がまだ会えていない人物がいるはずだった。はやる気持ちで木製の扉を開けたミッターマイヤーの視界に飛び込んだのは、こちらに半分背を向けてボトルが一本だけ置かれた白テーブルの前にたたずむ、軍服姿の長身の男性であった。ミッターマイヤーは彼の名前を呼ぼうとして、のどを熱いものがふさぐのを感じ

じ、わずかな空気を飲み込むことしかできなかった。男性はゆっくりと振り返った。

「遅いじゃないか、ミッターマイヤー」

声を出したいのに、出せなかった。足を動かしたいのに、動かせなかった。ミッターマイヤーはこのとき、ダークブラウンの頭髪を持つ美丈夫が彼の元へ歩いて近づいてくるのを、待ち受けることしかできなかった。^{ヴァルハラ}天上で再会したら、一発ぶん殴ってやろうとか、あれを言おうとかこれを言おうとか考えていたのに、それらの努力は全部無駄なものであったようだ。

「どうした？ミッターマイヤー」

面白そうな色を浮かべる金銀妖瞳を久々に間近で見たミッターマイヤーは、うつむいて歯を食いしばり、弱々しい拳をロイエンタールの胸に叩きつけた。

「お前は・・・おれに全部押しつけて先に行ってしまった・・・馬鹿野郎。おれがどれほど途方にくれたか・・・フェリックスがいなければ、やっていけなかった。おい、フェリックスは本当にいい子なんだぞ、お前と違って・・・あの子がいたからおれは・・・」

ミッターマイヤーは自分が何を口に出しているのかよくわからないまま喋っていた。ロイエンタールはミッターマイヤーの肩に手を置いた。

「ほう、どうやらフェリックスはおれよりはるかに頼りになるらしいな」

明らかにからかいであるその言葉に、ミッターマイヤーは顔を上げて反論した。

「ああ、そうだとも！」

固い友誼で結ばれた二人の青年―そうだ、彼らは青年だった―は、しばし互いの瞳を見つめあったああと、どちらからともなく苦笑した。ミッターマイヤーはロイエンタールから体を離し、白テーブルの上のボトルを見て言った。

「また卿と一緒に飲めるのだな？」

ロイエンタールは穏やかな表情で答えた。

「ああ。だが今はその時ではない。そら、ミッターマイヤー、出口だ」

ロイエンタールは木製の扉を指し示した。

ミッターマイヤーは扉を開けた。また変わりばえない芝生が続いているのかと思ったが、違った。彼の眼前に広がるのは、美しい庭園だった。堂々と立つ背の高い木に、美しく切りそろえられた背の低い木。そして色彩も豊かに咲き乱れる花々であった。彼は庭木の剪定をする父の姿を見つけた。そのそばで父の手伝いをする母の姿も見つけた。しかし、身をひるがえす様子が燕を思わせる、クリーム色の髪をした女性がミッターマイヤーの瞳に映ったとき、彼は親不孝にも両親の存在をほとんど忘れてしまった。

「エヴァンゼリン！」

数瞬後、エヴァンゼリン・ミッターマイヤーはウオルフガング・ミッターマイヤーの腕の中にいた。ミッターマイヤーは愛妻を抱きしめたまま口を開いた。

「エヴァ、やっと会えた・・・」

エヴァンゼリンは小さく「はい」とだけ答えた。ミッターマイヤーは腕の力を緩めながら、もう一度、エヴァ、と彼の妻に呼びかけた。「ここまで歩いてきた風景が、ひどく単調で殺風景に見えたんだ。

でも、なんでそんな風に見えたのか理由がわかったよーエヴァ、君がいないからだ。君がいない景色は、彩りに欠けてーとても味気ないんだ」

「ウオルフ、じゃあ今は景色はどんな風に見えて？」

「ひとつひとつがーどんなに小さなものでもー強く輝いて見える」エヴァンゼリンはミッターマイヤーが最も彼の愛する笑顔を見せて言った。

「あなた、ウオルフ、私もですわ」

蜂蜜色の頭髪をした青年は、再び妻を強く抱いた。彼が走り続けることが出来るのは、彼を癒し、新たな力を与えてくれる帰る場所があるからである。ミッターマイヤーは銀河の至るところを、誰にも負けない早さで駆け抜けてきた。しかし、彼が帰る場所はただひとつ、すみれ色の瞳とバラ色のほおを持つ女性のもとなのだ。帰ってきた―帰ってきた、ここに。

黄金色のバラが、彼らの傍らで咲き誇っていた。

新帝国歴05X年8月、ローエングラム王朝創設の功臣、獅子の泉ルーヴェンブルンの主席元帥ウオルフガング・ミッターマイヤーはその生涯を閉じる。愛妻エヴァンゼリンに先立たれた3年後のことであった。

新帝国歴05X年8月（後書き）

銀英伝を初めて読み終わったとき、死んだ人たちの無念もさることながら、生き残った人たちのこれからの試練を思うと色々と考えさせられることがありました。そうしてこの話を思いついたのですが・
・。ここまで読んでくださり、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6392o/>

再会

2011年1月14日03時08分発行